

国記録選択無形民俗文化財

# 大島半島のニソの杜の習俗調査報告書

おおい町教育委員会





瓜生の杜（写真中央）



瓜生の杜 小祠と供物

執筆者一覽（順不同・敬称略）

外岡 慎一郎（敦賀市立博物館館長）

多仁 照廣（元敦賀短期大学教授）

金田 久璋（元福井県文化財保護審議会委員）

一矢 典子（御食国若狭おぼま食文化館学芸員）

今石 みぎわ（国立文化財機構・東京文化財研究所研究員）

今井 三千穂（福井県文化財保護審議会委員）

八木 透（佛教大学教授）

新谷 尚紀（國學院大学教授）

小川 直之（國學院大学教授）

福田 アジオ（国立歴史民俗博物館名誉教授）

## 目次

## 第二章 ニソの杜の特色

巻頭図版

大島各区位置図

序

例言

凡例

## 第一章 大島の概要

第一節 おおい町および大島の地勢…………… 2

第二節 「若狭国乎入郡嶋山佰町」の行方

く若狭国惣田数帳で考える 外岡慎一郎…………… 5

第三節 大島の歴史 多仁 照廣…………… 13

## 第二章 大島のニソの杜

第一節 ニソの杜の概要 金田久璋編…………… 34

第二節 各杜の解説 金田久璋編…………… 44

第一節	ニソの杜の祭祀における神饌と食習	一矢 典子…………… 126
第二節	ニソの杜の樹林文化	今石みぎわ…………… 130
第三節	ニソの杜の植生と大島	今井三千穂…………… 134
第四節	若狭大島の家と村落構造	八木 透…………… 141
第五節	葬送墓制の調査報告	新谷 尚紀…………… 149
第六節	ニソの杜と年中行事	小川 直之…………… 159
第七節	ニソの杜の近代	福田アジオ…………… 169

## 第四章 総論

第一節 ニソの杜の歷程と盛衰

―過去・現在・未来― 金田 久璋…………… 184

協力者一覧…………… 224

参考文献一覧…………… 225

あとがき…………… 228

# おおい町および大島の地勢

## 一 おおい町の地勢

おおい町は、福井県の南西部に位置し(図1)、西は高浜町と京都府綾部市、南は京都府南丹市、東は小浜市と滋賀県高島市に接し、面積は二二・一九km<sup>2</sup>で、そのほとんどを中山間地が占めている。町域の九〇パーセント以上を山林が占め、北は若狭湾に面し、その海岸線は典型的なリアス式海岸を形成しており、一帯は若狭湾国定公園となっている。河川は、京都府との県境を水源とする佐分利川水系(大飯地域)と南川水系(名田庄地域)が平野の中央を貫くように西から東へ向かって流れ、小浜湾に注いでいる。山地は、西側の京都府との県境に頭巾山(八七一m)、南側に八ヶ峰(八〇〇m)、東側の京都府・滋賀県との県境に三国岳(七七六m)がある。

若狭地方は北緯三五度五〇分内外の緯度上に位置し、北陸地方の中で最も緯度が低い。気候は、沿岸部では対馬暖流の影響もあり比較的温暖で降雪量も少なく、冬季の北西の季節風による影響を除けば比較的しのぎやすい風土である。一方、山間部は沿岸部に比べ平均気温が約一・八度低い内陸性の気候となっている。雨量は年間を通じて多く、降雪量は近年少なくなってきたものの、多いところでは七〇〜一〇〇cm程度ある。

地質は、大飯地域は超丹波帯、名田庄地域は丹波帯と呼ばれる地質体が分布している。超丹波帯は構造的上位から大飯層と氷上層に区分され、大飯層は千枚岩様を呈する頁岩を主体とし、砂岩・砂岩頁岩互層・チャート・珪長質凝灰岩や泥質混在岩を伴う。氷上層は主に塊状の緑灰色砂岩からなり、頁岩や泥質混在岩を伴う。丹波帯は砂岩・頁岩・砂岩頁岩互層からなる。丹波帯は東西南北一〇〇km以上の幅で、頁岩・粘板岩・チャート・緑色岩類・石

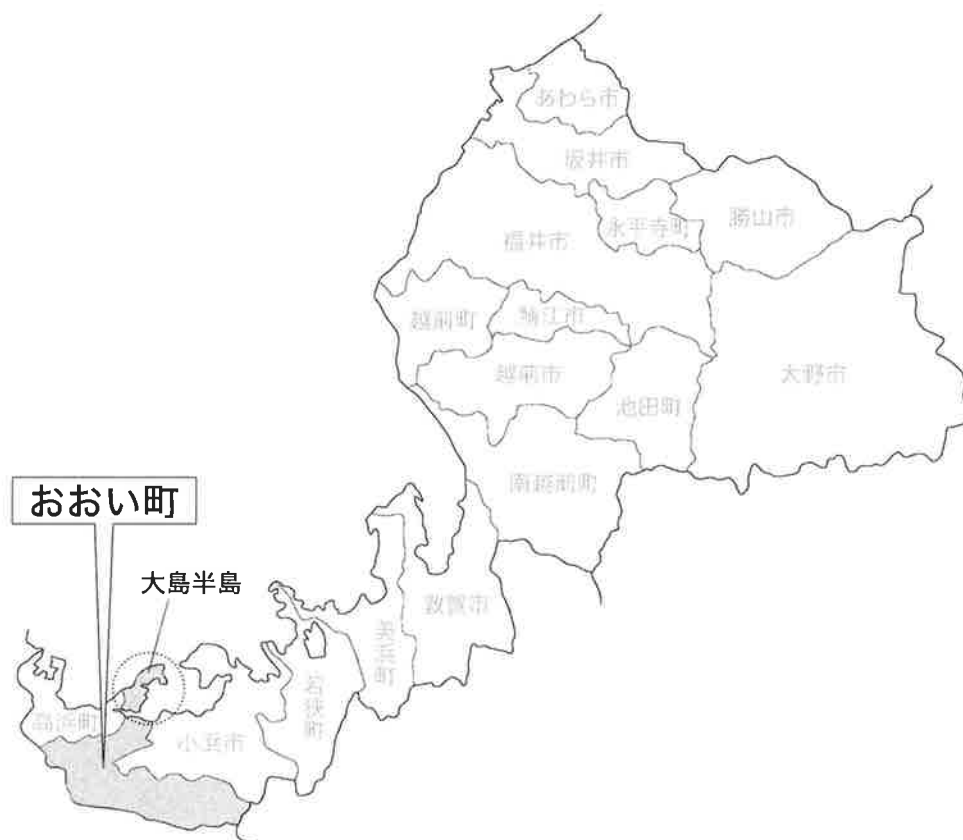


図1 位置図

## 「若狭国平入郡嶋山佰町」の行方

↳ 若狭国惣田数帳で考える

外岡 慎一郎

### 一 はじめに

大島半島の歴史が語られるとき、かならず紹介されるのが『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』（以下、「大安寺資材帳」）が載せる「若狭国平入郡嶋山佰町」である。

天平十八（七四六）年十月四日付の僧綱所の指令により、大安寺はその創建の経緯・沿革（縁起）と寺院財産の目録（流記資材帳）を作成し、翌十九（七四七）年二月十一日付で僧綱所に上申した。僧綱所では佐官僧がこれを監査し、天平二十（七四八）年六月十七日付で監査者の署名を加えて大安寺に戻して永久保存を命じたのである。これが今にのこる「大安寺資材帳」である。ちなみに、僧綱所とは僧尼や寺院を監督する役所で、奈良時代には薬師寺にあった。佐官僧は僧綱所の職員で僧綱（僧正・僧都・律師）を補佐する役割である。

さて、この「大安寺資材帳」に載せられる文武天皇の寄進という墾田地九三三町のかなかに、「若狭国平入郡嶋山佰町」の記載があり、その「四至」（東西南北の境）は「四面海」とある。この「嶋山」が大島半島のことと理解されてきている。大飯郡が遠敷郡から分立するのは天長二（八二五）年七月（『日本紀略』）。もともと島であったのが堆積砂州によって陸続きになったのは天長七（八三〇）年頃と伝えられるから（『福井県の地名』一九八一 平凡社）、「平入郡嶋山」が「四面海」という記載に無理はない。

奈良時代の大島半島に一〇〇町の田地が存在したのか、確かめる術はない。ただ、いま紹介したように、「大安寺資材帳」は僧綱所の監査を通過している文書である。「嶋山佰町」と並んで載せられる伊勢国六六二町のうち員弁郡宿野原五〇〇町については、「開田」三〇町、「未開田」四七〇町と記されている。仏像・仏具・経典、あるいは建造物などと同様に、墾田についても現状把握がおこなわれていた可能性を考慮すれば、あながち架空の数字と決めつけられない。

そこで、これまで多く参照されてきたのが鎌倉時代の文永二（一二六五）年の『若狭国惣田数帳』（東寺百合文書ユ、以下「惣田数帳」）である。表題の通り若狭国の土地台帳で、これに記載される「志万郷」が大島半島に比定されてきている。すでに、平城宮跡出土木簡に「遠敷郡嶋郷」と記すものが二点あり、それぞれ調塩を貢納していたことが知られている（奈良国立文化財研究所木簡データベース <http://jien.nabunken.go.jp/index.html> 『大飯町誌』一九八九 大飯町）。「平入郡嶋山」が平城宮出土木簡の「遠敷郡嶋郷」、惣田数帳の「志万郷」に転じたと考えて問題はない。

一方、惣田数帳に示される「志万郷」内の名と、大島半島の開発伝承や「二ソの杜の習俗」にかかる「二十四名」との関連が推考されている（山口久三「島山陌町の昔」一九六七）。しかし、「名」という文字を共有してはいても、地域の特定の家や同族集団等の祭祀にかかる「名」と、土地の開発（墾田化）や得分権にかかる「名」とは根本的に異なる存在であり、歴史的名辞である。本稿では、「若狭国平入郡嶋山佰町」の行方を「惣田数帳」に求める作業を通じて、「志万郷」の「名」の実態について基本情報を確認していく。

# 大島の歴史

多仁 照廣

## 一 大島の位置と景観

おおい町大島にある大島半島は小浜湾の湾口にあり、幕末に砲台(写真1)が築かれた半島北端に位置する鋸崎は、小浜市泊の松ヶ鼻と相對して小浜湾口の関門をなしている(写真2・図1)。現在は半島を形成しているが、後述する「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」に「四至四面海」とあるように天平時代は島であった。島を囲む海は現在よりも上昇していて、海岸線は現在よりも高い位置にあったと考えられる。

中村政久『釋文 若狭郡具志 全』(一九三八)によれば、「この地に数多の山岳海面に湧出す。その周辺五里ばかり。これを大嶋と名づく。中世その間細砂留滞して海潮を隔つ。」とあり、高浜町和田と陸繋となったことが記されている。

大島を特色づける伝説に、大島は、元は天皇の領地である天領で、ある退位された仏帝が隠棲し、二十四名に荘官位を授けた伝説が、延宝三(一六七五)年に書かれた「長樂寺縁起」にある(写真3)。また、大島は流人の島という伝承があるが、具体的な流人については確たる記録はない。勧請綱にさげられる勧請板は、藤原姓と物部姓であるのもこうした貴種伝承による。

『平家物語』の宇治川の戦いにおける佐々木高綱と梶原景季の先陣争いで、高綱が乗る名馬・池月と、景季が乗る名馬・磨墨が競った話は著名であり、磨墨の産地については複数の説があるが、ここ大島の最高峰大山(四七八m)は「塚山」「安土山」「和田山」「犬見山」とも称され、この山麓もその伝承



写真2 東側から見た大島半島  
(犬見を除く大島の集落の全景)



写真1 小浜藩台場跡 松ヶ瀬台場跡



写真3 長樂寺縁起 (新谷省三家所蔵)

## ニソの杜の概要

金田 久璋 編

### 一 ニソの杜について

ニソの杜はおおい町大島地区に所在し、二十四名の開拓先祖を祀ると伝承される聖地で、三三カ所点在する。所在地の地名を付して「浜禰の杜」「清水の前の杜」「瓜生の杜」などと呼称されるが、地元では「ニソ」や「ニソソ」「モリサン」と呼ばれている。祭祀は毎年十一月二十二日あるいは二十三日に行われており、祭祀当日は荒天になるとされ「ニソ荒れ」といわれている。一軒で祀るもの、数軒で一つの杜を祀るもの、あるいは数軒で複数の杜を祀るものなどがあり、一軒で三カ所の杜を祀る家もある。祭日以外近寄ってはならない、一人でお参りしてはならない場所とされ、生えている木を伐ることも禁忌とされている。



写真1 日本放送協会（NHK）によるニソ講の再現

大島地区は、半島南部に位置する犬見を除き、南浦・西村・河村・日角浜・畑村・脇今安・宮留の七区があり、新興住宅地である南浦を除くすべての区内にニソの杜が所在する。内訳は西村七カ所、河村七カ所、日角浜二カ所、畑村一カ所、脇今安一〇カ所、宮留六カ所で、脇今安が最も多い（表1）。

祭祀は二〇カ所の杜で続けられ、廃絶した杜が一カ所、一時中断している杜が一カ所ある。杜は鬱蒼とした森を形成するが、近年の土地開発や道路改良などにより、杜の面積が縮小したり、道路によって分断された杜も存在する。また、祭祀者の祀りごとへの無関心、生業や勤務形態の変遷、後継者がいないなど、杜の荒廃や祭祀の放棄が進み、いちだんと危機的な状況となっている。

日角浜に所在する島山神社には、摂社である余永神社がある。御祭神を記したものはないが、御神座が二四座に分かれ、各々に神霊が祀られていることから、「二十四名の開拓先祖を祀る」ニソの杜との関係が示唆されている。ニソの杜の学説、研究史、「ニソ」の語源については第三章第七節および第四章を参照されたい。



写真2 島山神社



写真3 余永神社



## 各社の解説

金田 久璋 編

### 一 浦底の杜(ウラソコ・ウラソコ)

#### (一) 所在地

福井県大飯郡おおい町大島第一二三号字浦奥第六八番  
浦底の杜は、浦底の集落近くに所在し、宅地と白山神社に隣接している。

#### (二) 所有者

大谷久治郎 他四名

#### (三) 祭祀者・祭祀する家(カッコ内は地区・屋号・生業)

中谷家(西村・中屋・漁業)・大谷家(西村・大屋・旅館業)・森本家(西村・森本・農業、旅館業)・石田家(西村・新左・旅館業)の四軒が輪番で祭祀を行い、四年に一度当番が回ってくる。また、当社は三三カ所ある杜の中で唯一僧侶が祭祀に立ち会う。

当番の親族に不幸があれば次の当番へ回す。もしくはその年は祭祀を行わないこともある。出産などは関係なく行方。平成二十七(二〇一五)年の当番は大谷家。

#### (四) 祭祀日

毎年十一月二十三日の早朝七時から八時頃に祭祀を行う。



浦底の杜外観

## ニソの杜の祭祀における神饌と食習

一矢 典子

### 一 大島の食習

かつて大島では、半農半漁の自給自足の生活が長く営まれてきた。他の典型的な漁村と異なり、米の自給ができ、野菜などの農作物も作る事ができた。豊かな海の幸をはじめ、食生活は比較的恵まれた環境にあった。

### 二 ニソの杜の祭祀における神饌の概要

各杜で異なるが、十一月二十二日夕または二十三日朝か夕（一カ所は十二月）に供える。最も特徴的な神饌は、赤飯または小豆飯をにぎったものの上に、シロモチ（かつてはタガネ）などと呼ぶシトギをのせて供えることである。これらを、その年に採れた稲藁の上にのせて供える。一部の杜ではフネと呼ぶ藁苞や藁の両端を束ねたものを作る。または、飯がのる大きさに藁を切り、敷いて用いるなど器の役目を果たす。いずれも米（稲）を材料にした神饌である。さらに、稲藁で注連縄を作り、紙垂をつけて祠に供える。

ほかに、近くの海岸（添浜や袖ヶ浜）でとってきたゴイシなどと呼ぶ海で洗われた石や砂、杜によっては海藻のホンダワラ（モと呼ぶ）を供える。御幣は竹と半紙で作って供える。いずれの杜も箸は供えない。こうした神饌は各家で準備し手作りする家が多いが、市販の物を用いる家もある。神饌の準備に男女の禁忌はないが、赤飯や小豆飯などの食は女性が前日から用意することが多い。神饌は下げずに供えたままでカラス勧請が行われる。

かつては、各杜でニソダ（ニソ田）と呼ぶ田があり、この神田で作った米で神饌を賄ったほか、ニソ講と呼ぶ講が行われていたが、現在は無い。

### 三 赤飯・小豆飯とシトギの神饌

各杜で共通して供えるのが、赤飯または小豆飯である<sup>1)</sup>。赤飯は、糯米と煮ておいた小豆を蒸して作る。小豆飯はアズキゴハンとも呼び、煮ておいた小豆と粳米を炊いて作る。にぎりやすいように小豆飯から赤飯に変えた家が数軒あるなど、小豆飯が本来の神饌であったと考えられる。形は丸く（縦長の楕円・俵型のおにぎりなど）にぎって供える。大きさは一口大から一〇cm程度で、この間（長い方が六〜八cm程度）の大きさの杜が多い。供える数は、各杜・カラスグチ・同じ祭祀者でも年によって異なる場合があるが、一〜五个の赤飯または小豆飯を供え、二・三・五个を供える杜が多い。シトギ（黍）は、米を水に浸けて柔らかくしたものを、臼やすり鉢などで粉にし、火を用いず水などで練って餅や団子状にしたものである。最も古い資料で平安時代前期の『新撰字鏡』に「志止支」、承平四（九三四）年頃成立の『和名類聚抄』には「黍 之度岐 祭餅也」と、祭祀に関わる餅であったことがわかる。

シトギを行事や儀礼の神饌に用いる地域は北海道から九州まで広くあり、特に山の神を祀る行事が多い。柳田国男は、シトギは古くからの特別な日の食で、古い神社の祭祀や棟上げ式、屋根替え、死者への供物などに用いられたと指摘し〔柳田 一九八五 四八〜七七・一九七四 七六〜一八六〕、次のように述べている〔柳田 一九七四 一六〇〕。

臼、杵が今の形に改良されるまでは、これが今日の餅に代るべき改まった食品であり、正式の米食法であった。本来は晴れの日の食物で、人だけ

## ニソの杜の樹林文化

今石 みぎわ

### 一 聖域としてのニソの杜とタモノキ

ニソの杜は、モリである<sup>1)</sup>。それは一本のご神木ではなく、樹木の群れとして認識されており、結果として一定面積の領域がニソの杜の範囲とされてきた(写真1)。さらにこの領域を禁足・禁伐の地とし、人の手が入ることを忌むことで、周囲とは異なる植生環境が保たれてきた。

そのニソの杜の領域の中には、たいてい中心となる巨木があり、そのまわりに小径木やササなどが茂ることで聖域が形づくられている。そうした巨木の根元や傍らには小祠が置かれる場合も多く、人びとは自ずから、巨木に向かって供物を供え、手を合わせることになる。ニソの杜を祀ることを地元では「杜まつり」とも呼ぶように、この祭祀の中心にあるのは樹木の群れとしてのモリなのである。

これら杜の中心をなす巨木のうち、圧倒的に数が多いのが、地元でタモノキと呼ばれるタブノキ(クスノキ科)である。今井三千穂による植生調査(第三章第三節)によれば、三三カ所確認されているニソの杜のうち、現状で最大木をタモノキとする杜は一六カ所となっている。これに平成十五(二〇〇三)年の金田久璋・福永吉孝による植生調査の成果を加え、タモが枯死したり伐採された杜も含めれば、かつては二五カ所以上の杜でタモの巨木が見られたことがわかる。さらに、これらのうち約半数の十数カ所の杜では、タモノキの根元や傍らに祠が置かれたり、タモノキの根元に直接供物が置かれるなどして杜まつりが行われてきた(写真2・3・4)。



写真1 大坪の小杜  
田んぼの真ん中に浮かんだ島のような領域の全体がニソの杜の範囲になっている

ではない。その意味では、杜は常に人々のイメージのなかで記憶・更新されてきたといってもよく、ここではタモノキが非常に大きな存在感を持つてきた。このタモノキは、死者との結びつきが深い木である。大島ではタモノキは用材としては役に立たないと言われ、その用途はほぼ葬送儀礼の用具を作るのに限られてきた。大島では土葬時代の棺桶の担ぎ棒や、葬送行列で掲げ持つテンガイ、年忌の際に立てる卒塔婆などの材にタモノキを用いるのが一般的であった。

また、タモが墓や古墳などの埋葬施設に生える木だと認識されている点も

これらの客観的事実に加え、より重要なのは大島の人々の認識である。大島の人々にとっては「杜」タモ」という認識が強く、「杜にはたいていタモがある」あるいは「タモは杜にしかない」ことが人々の認識としてしばしば語られる。特にニソの杜は一年に一度だけ訪れる場所であり(第二項参照)、人々は杜を構成する樹木についてこと細かに見たり覚えたりしているわけ

## ニソの杜の植生と大島

今井 三千穂

### 一 はじめに

大島半島は日本の森林帯区分の暖温带または暖帯林に属し、年平均気温一三度から二一度のゾーンに含まれる。また、宮脇昭はこの暖温带を「ヤブツバキクラス域」と区分している〔宮脇 一九七七 三四〕。半島中央北部の相観は谷筋沿いのスギ造林地を除き、海岸沿いから約二〇〇m前後の峰までシイ・カシ類、タブノキ、ヤブツバキなどの混生する常緑広葉樹林（照葉樹林）が大半を占めるが、落葉広葉樹を混生している。また、各地区の山麓沿いにはところどころ竹林がみられる。

ニソの杜もこの植生帯の中にあるが、この杜の植生に関する調査報告は皆無に等しく、金田久彰の『ニソの杜の現在―自然景観と植生―』（金田二〇〇三 二二二〜二四六）が、唯一の報告ではないかと思われる。そこで、今回植生調査の機会に恵まれ、三三カ所の杜に方形区を設定して毎木調査を行い、林分の階層構造と林床の植生を調べた。なお、方形区は現地での境界確認が困難なため、小祠や祭壇用台石などがある場所に設定した。また、調査面積は林況や地形に応じ適宜決めた。

### 二 各ニソの杜の地況・林況

各ニソの杜の地況・林況を表1に示す。三三カ所の杜は大島半島の浦底から小浜湾に面した海拔高二五m以下の海沿いに細長く半島先端近くまで分布



写真1 窪の杜

しており、その四〇パーセントが住宅に隣接した山麓の斜面に位置し、地区内の平地に一八パーセント、四二パーセントが住宅地より離れた農地に隣接した山麓に位置している。斜面の方位は北東斜面が多く、次いで南東、南西、北西の順となる。傾斜は平均二〇度（最大四〇度、最小三度）である。胸高直径（地上高一・二m）一cm以上の立木について一〇m当たりの本数を数えると、平均〇・九本（最大二・三本、最小〇・二本）となる。この密度の中に竹は含まれていない。竹の占める割合の高い杜が二三カ所あり、その発生密度を同様に調べた結果、平均一七・八本（最大二五〇本、最小〇・二本）である。密度〇・四本以下の井上の杜1・井上の杜2、およびマタの杜ではこれまで優占種となっていたモウソウチクが枯れてしまい、更新の兆候が見られない。この枯死によって植生回復が期待できそうであるが、シカの棲息が見られることから安定した植生回復につながるか疑問である。

## 若狭大島の家と村落構造

八木 透

### 一 はじめに

本稿では大島の家、特に古くから伝わるこの地域特有の家格制とその変遷、およびこれらの家格の存在とニソの杜祭祀との関連性について記述する。大島には「二十四名」「十二氏」「長百姓」「禰宜」「田楽」など、数多くの複雑な家格が存在する。さらに加えて、「親方・子方制度」や「本家・分家関係」などの家関係を示す概念が存在することから、大島の村落構造を考える上で、これらの家格制や家関係の実態を説明することは必須であると考えられる。そこで本稿では、昭和二十年代前半に大島を調査した安間清の報告、および昭和三十九（一九六四）年に調査した福田アジオの報告を元に、近年の筆者の調査におけるデータを加味しながら、大島の家と村落構造の特質について、特にニソの杜の祭祀との関連に留意しながら考えてみたい。

### 二 二十四名と十二氏

安間清の報告によれば、大島には村の草分けと伝えられる二四戸の伝承があるという。すなわち、この村の開祖である二四の宗家の先祖を祀った杜が「ニソの杜」であり、本来は二四社あるはずだが、安間の報告では三〇社とされて六社多いことになるが、その理由は不明だと記されている<sup>〔1〕</sup>。またこの二四戸の家系をカブと称し、それは四種に分かれるという。すなわちネギ（禰宜）カブ・デンガク（田楽）カブ・カンナギ（神巫）カブ・オサビヤ

クシヨウ（長百姓）カブである。このうち禰宜カブは、村の氏神である島山神社の氏子総代に相当する家である。七集落合わせて八戸あり、村内の生活全般にわたって中心をなす家であったという。また田楽カブは、島山神社の祭祀に神楽を奉納した家筋で、合わせて五戸あるという。神巫カブは一戸だけで、字のごとく巫俗を担う家筋である。またこの家は、二四戸以外からは決して嫁を迎えないとされていたという。長百姓カブは、二四戸のうち、先の禰宜カブ・田楽カブ・神巫カブの合わせて一四戸を差し引いた残りの一〇戸を指し、「十人衆」ともよばれるという。またこれらの二四戸を総称してオモビヤクシヨウ（重百姓）ともいい、さらにこの二四戸にやや従属する古い家系をフビト（史人）とよぶと記されている。

安間は昭和二十三（一九四八）年時点の大島村の全戸について、村役場の資料に基づいて一覧を示し、さらに各戸の家格を明示する表を作成しているが、それを見る限り、「二十四名」に属する家は一四戸しか存在せず、この時点ですでに半数近くは他所へ転出したか、あるいは不明となったものと思われる。

安間の報告より一五年後の昭和三十九年に、同じく大島を調査した福田アジオによれば、「現在の大島には少なくとも『二十四名』という家格は存在しない。『二十四名』という言葉はたしかに村の開祖の家々のこととして伝承されているが、その家が現在どこにあたるのかは全く不明である。大島には各種の祭祀組織・行事があるが、その中で『二十四名』という呼称は使用されていない<sup>〔2〕</sup>」。「福田 一九六六 四九〇五〇」と記され、この時点では少なくとも「二十四名」は単なる伝承にすぎず、実態を有するものではないことがうかがえる。さらに福田は「大島における祭祀組織に表現された家格は十二氏・禰宜・田楽の三種類である」。「福田 一九六六 五〇」とし、「二十四名」に代わる「十二氏」という家格の存在を指摘する。しかし安間の報告に

## 葬送墓制の調査報告

新谷 尚紀

### 一 土葬を行っていた時期の葬式

ここでは、土葬の時期の葬式として宮留地区の事例を中心に記述する。宮留地区の葬式については、中間松壽氏（昭和十七（一九四二）年生）夫妻の語りを中心として、昭和五十二（一九七七）年頃に行なわれた祖父の中間松太郎氏（享年八十八歳）の葬式などの経験を元にした<sup>①</sup>。

### （一）宮留地区の位置関係

#### 一、行政的組織とその区分

平成二十八（二〇一六）年の宮留地区の戸数は二五戸である。行政区分は宮留地区全体が一つであり、区長も地区全体で一人である。ただし、回覧板は地区内で東西二つの班に分かれている。それぞれの範囲は、かつての八幡神社と川があった場所を境に分かれている。西側の班はナーマと呼ばれており、東側の班は特に呼び名がない。

#### 二、信仰的組織とその区分

宮留地区には、北側の海岸近くに諏訪神社、地区の東側には観音堂がそれぞれある。身内で葬式などの不幸が生じた場合、神社やニソの杜に参ってはいけないとされているため、神社の祭祀とニソの杜の祀りの役は他の人に代わってもらう。

#### 海岸寺の檀家組織

宮留地区では、全戸が協今安地区にある臨濟宗海岸寺

の檀家である。海岸寺の宮留地区の檀家総代は、大道家（屋号・ダイドウ）と藤原家（屋号・マゴザ）の二人である。

#### 島山神社（元・八幡神社）の氏子組織

海岸寺の檀家総代である大道家と藤原家は、島山神社の禰宜も務めている。もともと宮留地区には、集落の少し北側のすぐ近くを川が流れていたところで、現在は田畑になっている場所に八幡神社があったが、明治四十四（一九一）年に島山神社に合祀された<sup>②</sup>。現在でも八幡神社の氏子と島山神社の氏子に分かれており、宮留地区は八幡神社の氏子となっている。

#### 諏訪神社の講社

宮留地区の北側の海岸付近には諏訪神社がある。この諏訪神社は、諏訪神社の講社である宮留地区の中間家、畑村地区の新谷家・庄司家・糺谷家、協今安地区の中根家（後継ぎがなく現在は空き家）の五戸でかつては祀っていた。昭和五十年代に講社で補助金を使って諏訪神社の鳥居を新調し、その際に長崎県と長野県の諏訪神社にお参りしたという。諏訪神社は昔からここにあった。かつては、毎年十月九日に祀りを講社の人が一年交代で行なっており、その時にみんなで草刈りなどの管理をしていた。

#### 東方寺（観音堂）の講社

宮留地区の東側の山際には東方寺があり、立派な阿弥陀如来坐像や観音像が安置されている。東方寺の講社の家は、宮留地区の中間家・藤原家・小西家・藤井家・宮代家・常木家・扇谷家・大道家の計八戸である。観音参りの日である毎月十七日には、講社の家の女性が東方寺に参る。毎年、講社の人が交代しながら、東方寺の入り口にジャ（蛇）と呼ぶ藁綱を作って張りわたす。その観音堂にも田んぼがあり、むかしは講社の八戸が一年交代でその田を作り、その年に取れた米はその年に作った人のものになっていた。

#### ニソの杜

宮留地区には、浜禰の杜・新保の杜1（赤栗）・新保の杜2（神田）・神田の杜・ツカネの杜・大坪の小杜という六つのニソの杜がある。ニ

## ニソの杜と年中行事

小川 直之

### 一 ニソの杜祭祀の現在

現行の「ニソの杜」の祭りについては、第二章「大島のニソの杜」で詳述されているが、ニソの杜祭祀と年中行事との関連をみていくにあたり、いくつかのニソの杜の祭りをあげておく。

たとえば河村区の大谷家では「大谷のモリ」と呼ぶモリを祀っており、十一月二十二日には稲藁でつくった舟形の容器に、白玉を上のにせたアカメシ（赤飯）のニギリを三つ入れて大谷のモリに供える。ここにはオズシ（祠）が祀られ、オズシに新しい注連縄を張り、その両脇に細い竹に御幣をつけたものを六本ずつ立てる。これは一年十二月をあらわしたもので、閏年には合計で一三本とする。供物は、不思議に次の日にはなくなっているという。かつては大谷家の五、六軒の分家もこのモリを祭り、本家はマツリナオシとって分家の祭りを見守った。また、後日、祭りの供物が残っていたことがあり、この年にはムラで火事が起きた。病人が出たこともあり、これはモリの祟りだといわれたという。また、「モリの木は伐るな」といわれていたが、これは「モリがさみしくなる」からだという。

もう一例あげると、西村区は集落が東から左口・中口・西口の三つに区分されており、中口の森下家では中口のモリ、窪のモリの二カ所のモリを祀っている。二カ所のモリを祀る家は大島でも稀で、どのような理由で二カ所のモリを祀るようになったのかについては不明であるが、昭和三十年代末にはすでに二カ所のモリを祀るようになっていたという。中口のモリは森下宅の

西の丘にあるモリで、ここにはケヤキの大木があつて、その下に祠が祀られていた。このケヤキは根が一つで幹が二股に分かれ、枝を大きく広げた大木であつたため、近所から枝が家にかかるという苦情があり、神主にお祓いをしてもらい枝を切ったことがあるという。窪のモリは西村区から離れたところで、宝楽寺（河村区）の北側、ガソリンスタンドの横道をしばらく入った山林にある。窪のモリは、平成二十八（二〇一六）年に祠を新しくしている。西村区では、これら森下家のモリのほかに西口のモリがあり、これは西口の下西家と中口の河口家などが祀っているという。

森下家の二つのモリの祭りは、家や親族に不幸があつた年には祭りを行わない。森下家の前当主が亡くなった年にはモリの祭りを行わなかったが、その翌年からは、当時高校生だった息子が中心になつて祭りを行うようになり、現在に至っている。また、モリにはその祭りのための水田があつた。中口のモリには家の近くに数畝の水田があり、窪のモリにもザクラという所に水田があつた。この水田で獲れた米を使って供物を作るが、現在は中口のモリの水田はない。

モリマツリと呼ぶモリの祭りは十一月二十三日である。しかし、現在の祭りの中心になつている森下家の当主は会社勤めのため、仕事の都合上二十三日にできず、その前後の休日に行っている。祭りに必要なものは、ニソの杜にある祠に張る注連縄・竹の槍・供物・きれいな砂（砂利）で、供物は祭りの前日、その他はこれ以前に作ったり、用意したりしておく。竹の槍というのは、三〇cmほどの長さで先を斜めに切った篠竹で、これに幣束を挟んで祠の両側に六本ずつにわけて供える。祭りの時に祠の前に敷くきれいな砂は「荒海のきれいな砂」で、大島半島北側のスエノ浜（添えの浜）に採りに行く。供物はアカメシ（赤飯）と呼ぶ粳米に小豆を入れて炊いたご飯を俵形のむすびにしたもの二個と、カワラモチと呼ぶ粳米を粉に挽いて水でこねて小判形

## ニソの杜の近代

福田 アジオ

### 一 ニソの杜の登場

ニソの杜は民俗学の世界では有名な存在である。民俗学を大学の講義で学んだ人であれば、先祖祭祀とか同族祭祀の典型的な事例とか代表的な事例と紹介されたのではなからうか。しかし、民俗学の外に一步出れば、ニソの杜の名称もその祭祀の実際もほとんど知られていない。あくまでも民俗事象であり、民俗学の研究課題として存在してきた。

ニソの杜が世間に紹介され、民俗学関係者がそれに注目するようになったのはそれほど古いことではない。ニソの杜を最も早く記述紹介したのは福井県大飯郡教育会『福井県大飯郡誌』(一九三二)であろう。郡誌は個別町村毎に記述するが、その大島村の箇所において最後の風俗の項でニソの杜を紹介している。以下のような文章である。

にその講 にその杜とて村内各所に小祠あり。志摩の始め二十四戸あり、各其の祖を祭れるなるべしといふ。旧曆霜月の二十二日の夜定例の供物を奉賽し、二十三日直会式を挙行す。杜の神に因縁あるのは悉く参集するを常とす崇祖報本の情掬すべきなり。

ニソの杜の名称を列挙せん、一、浦底の杜、一、博士谷の杜、一、瓜生の杜、一、西口の杜、一、中口の杜、一、サグチの杜、一、脇城の杜、一、ダイヂクの杜、一、一の谷の杜、一、窪の杜、一、清水の前の杜、一、ハゼの杜、一、オンジャウの杜、一、日角浜の杜、一、大谷の杜、一、畑

村の杜、一、マタの杜、一、今安の杜、一、オタケの杜、一、脇村の杜、一、井上の杜、一、上野の杜井上及上野の両社は同名のもの二つとつあり、一、ハマネの杜、一、新保の杜新保の杜二つあり、一、神田の杜、一、つかねの林、一、小森等なり此の外に山の神を祀れる杜四ヶ所あり。(『福井県大飯郡誌』七四〇頁)

十一月二十二日・二十三日に行われる行事名を見出しに採用し、「にその講」として先ず注目される。そして、「ニソの杜」という小祠の存在を指摘し、その小祠は先祖を子孫がまつる祠と位置付けている。その上で、ニソの杜の名称を掲げる。二七の名称を掲げ、そのうちの二つの杜にはそれぞれ二つの杜が祀られていることを記しており、全部で二九のニソの杜を紹介したことになる。この名称はその後久しく採用された名称とほぼ一致している。これらの点において、この『大飯郡誌』の記述がニソの杜という名称を「杜」という漢字とともに、最初に広く紹介したと言えるであろう。ただ、その書物の性格から大飯郡あるいは若狭地方に普及は限定されたため、その後は取り上げられることはなかった。なお『大飯郡誌』は執筆者の氏名を掲げておらず、大飯郡教育会とのみ記している。そのため、このニソの杜の項を誰が執筆したかは不明である。ただ、当時大島村で資料を収集して歴史を研究していた人物は大谷信雄以外には知られておらず、後の各種の記載から判断しても大谷信雄の筆になるものと推定して間違いないであろう。

その後、ニソの杜が文献上に登場するのは、鈴木棠三の『若狭大島民俗記』(『ひだびと』一二巻三・四・五号 一九四四)である。当時民俗学の専門雑誌という性格を強くしていた『ひだびと』に掲載されたことにより、柳田国男をはじめ多くの民俗学研究者がニソの杜の存在を知ることとなった。鈴木の調査報告は大谷信雄から主要な情報を得て、大島における家格、祭祀組織



## ニソの杜の歷程と盛衰―過去・現在・未来

金田 久璋

### 一 ニソの杜の登場と初出

外海の若狭湾に沿って、内外海半島と大島半島が小浜湾を抱きかかえるように延び、その左腕に当たる東岸のおおい町大島には、「二十四名の開拓先祖を祀る」との伝承を秘めた「ニソの杜」と呼ばれる三三カ所の聖地（禁足地）が点在する。この聖なる杜が広く民俗学界に知られるようになったのは、福井県大飯郡教育会編纂により刊行された『福井県大飯郡誌』の「にその講」の記事がきっかけになったものと考えられる。とはいえ、初見のいきさつはわからない。

本書は名著出版の復刻版の「刊行にあたって」によると、昭和七年（一九三二）に出版され、昭和四十八（一九七三）年二月十九日に名著出版から再刊されたものである。目次によると「上編 全郡誌」「下編 處誌」に分かれ、「下編」には高浜町、内浦村、青郷村、和田村、本郷村、佐分利村、加斗村、大島村が章立てされ、大島村の「一〇 風俗」に「にその講」の記述がある。福田報告と重複するが、以下に引用する。

にその講 にその杜として村内各所に小祠あり。志摩の始め二十四戸あり。各其の祖を祭れるなるべしといふ。旧曆霜月の二十二日の夜定例の供物を奉養し、二十三日直会式を挙行す。杜の神に因縁あるのは悉く参集するを常とす崇祖報本の情掬すべきなり。

にその杜の名称を列挙せん一、浦底の杜一、博士谷の杜一、瓜生ウリウシの杜

一、西口の杜一、中口の杜一、サグチの杜一、脇城の杜一、ダイヂクの杜一、一の谷の杜一、窪の杜一、清水の前の杜一、ハゼの杜一、オンジャウの杜一、日角浜の杜一、大谷の杜一、畑村の杜マタの杜一、今安の杜一、オタケの杜一、脇村の杜一、井上の杜一、上野の杜 井上及上野の両社は同名のもの二つづつあり、ハマネの杜一、新保の杜 新保の杜二つあり一、神田の林一、つかねの林一、小森なり此の外に山の神を祀れる杜四ヶ所あり。（原文のまま）

本書の例言によれば、牧野信之助、上田三平の指導助言を受けて、高島正、堀口泰助編纂主任のもと、各委員の調査執筆によって刊行されたが、各章の分担については明記が無く大島村を誰が執筆したかは不明である。本編第三章に「当時大島村で資料を収集して歴史を研究していた人物は大谷信雄以外には知られておらず、後の各種の記載から判断しても大谷信雄の筆になるものと推定して間違いないだろう」と福田アジオ氏が述べているように、まずは文体や該博な知識、ニソの杜についての関心の持ち様からして大谷信雄と断言するしかない。大谷信雄は慶応三（一八六七）年生まれで、愛郷心の賜物とも言うべき地元郷土史に関心をもち、日々情熱を傾けられて該博な知識を深め、三冊の稿本「島山私考」（未定稿・未刊）と下記の「島山神社社記」「大島村漁業沿革誌」を残して昭和三十二（一九五七）年に九十二歳で逝去された。

実は『福井県大飯郡誌』よりも早く、序文に「大正五年弥生中旬」（一九一六）の銘記がある『島山神社社記』にも「にその杜」「にその神様」「にその祭り」の記述が散見する。大谷が生前に和綴じにして保管していた本書と、『大島村漁業組合沿革誌』を若狭路文化研究会（公財）げんでんふれあい福井財団が、若狭路文化叢書第十集として平成二五（二〇一三）年に復